

エディトリアル

川崎市立多摩病院救急災害医療センター センター長 田中 拓

診療所、病院を問わず、総合医として働いていると、専門医の処方を継続(Do)してそのまま処方することが多いのではないのでしょうか。最近新しい薬の名前を聞くけれども、どの程度効くのか、年齢、腎機能、肝機能等使用量の加減はどのようにすればいいのか、止めどきはいつか、そもそも自分が処方開始する際の目安は何か、などなど迷うことがあるのではないのでしょうか。

本特集では、比較的最近取載された薬について、診療所や一般外来でも日常診療の中で処方する薬から、専門医による評価に基づいた使用が必要な薬まで、最近の動向をまとめていただきました。明日からの自家薬籠がますます充実することになると思います。

総論として自治医科大学薬理学講座臨床薬理学部門の今井靖先生に近年の創薬の潮流について解説いただきました。オプジーボ®(ニボルマブ)の登場が癌治療に飛躍をもたらした免疫チェックポイント阻害薬、抗体医薬の進展、糖尿病、肥満治療に対するGLP-1、GIP受容体作動薬などの組み換え蛋白・ペプチド医薬は、総合診療の現場でも目にする機会が多いと思います。また、核酸医薬、遺伝子治療、細胞療法といった近年開発の進む薬について概説いただいています。まとめの項目ではさらに低~中分子薬の可能性についても言及いただいています。

各論では地域を知る専門家にご執筆いただきました。循環器領域として高齢化によりパンデミックとも称される心不全について多数の臨床試験に基づく治療戦略について示していただきました。代謝内分泌領域ではこちらも患者数が多く、地域でも遭遇する機会の多い糖尿病、肥満症について最近の薬を総括いただいています。消化器領域では最近20年あまりの薬剤でウイルス排除が可能になり、治る病気となったC型肝炎についてお示しいただきました。次の課題として、薬を活用するための患者拾い上げという地域の医師の役割が重視される近況を知ることができると思います。潰瘍性大腸炎も最近治療戦略が非常に多様になった疾患です。呼吸器領域として気管支喘息もこれまで吸入ステロイドが飛躍的な進歩でしたが、さらに難治性例に対する生物学的製剤が治療の重要な役割を占めてきています。腎臓領域として腎性貧血に対する経口可能なHIF-PH阻害薬とともに管理についてもお示しいただきました。

地域での処方に際しての注意も盛り込んでいただきました。一読しただけではやはり専門性が高いと感じるかもしれませんが、治療薬を俯瞰していただくことができると思います。ご自身が診療中の患者に関わりのある薬について機会を見て読んでいただくと、知識の整理につながると思いますのでご活用いただければ幸いです。

●編集委員のメンバー田中拓先生からのメッセージ

<https://www.youtube.com/watch?v=TJISCLLhIRY>

